

36. Steroid の奏効した脳腫瘍の2例

伊藤 康信・三浦 俊一 (脳神経疾患研究所)  
 協谷 健司・菊地 頭次 (南東北脳神経外科)  
 鈴木 幹男・渡辺 一夫 (病院脳神経外科)  
 伊藤 康之 (同 経放射線科)  
 島崎 茂 (同 脳神経内科)

Steroid 剤は脳腫瘍周囲の浮腫の改善に有効であるばかりでなく、脳腫瘍細胞に対して抗腫瘍効果を示すという報告がある。最近、私たちは頭蓋内圧亢進症状で発症し、steroid 剤投与により、CT 上で腫瘍陰影の縮少あるいは増強効果の減弱を認めた脳腫瘍の2例を経験したので報告した。

症例1は54歳の女性で、後頭部痛と複視で発症し、両側うっ血乳頭を指摘され、昭和60年3月1日に入院した。CT で脳梁膨大部を中心に両側に拡がる著明な増強効果を示す充実腫瘍がみられた。抗浮腫の目的で dexamethasone を投与し、CT で腫瘍陰影の著明な縮少が認められた。3月12日に腫瘍摘出術を行い、病理学的診断は悪性リンパ腫であった。

症例2は48歳の女性で、頭痛、嘔吐で発症し、昭和59年9月5日に入院した。CT で右側頭葉と左頭頂葉にリング状の増強効果を示す腫瘍陰影がみられ、steroid 剤の投与で増強効果の減弱が認められた。部分摘出を施行し、組織診断は glioblastoma であった。

37. 慢性硬膜下血腫で発症した脳腫瘍の

1 症例

新海 準二・嘉山 孝正 (国立仙台病院)  
 藤木 俊一・和田 徳男 (脳神経外科)

脳腫瘍に伴う腫瘍内出血はしばしば経験されるが、腫瘍内出血による慢性硬膜下血腫により発症した例は比較的稀である。我々は慢性硬膜下血腫で発症した脳腫瘍の一症例を経験したので報告する。

症例は54才女性で、主訴は歩行障害である。昭和59年12月より嘔気嘔吐を訴え、翌年1月18日当科入院となった。入院時、右片麻痺、失語症を認めた。CT scan では左側頭頭頂部に凸レンズ状の血腫陰影を認めるとともに、脳実質内に high density の mass を認めた。左 CAG で凸レンズ状の avascular area をみたが、腫瘍陰影は認めず、慢性硬膜下出血腫として開頭術による血腫除去術を行った。術中所見としては、厚さ1cm程の慢性硬膜下血腫の下に、境界不鮮明な脳腫瘍を認め、これに対しては、biopsy のみにとどめた。組織診断は oligodendroglioma であったが、diffuse な出血にとむ部分を、かなりの場所で認めた。腫瘍内出血により慢性硬膜下血腫に至ったと推測された。

38. 脊髄 subependymoma—2 症例の経験

永島 雅文・井須 豊彦 (北海道大学)  
 岩崎 喜信・田代 邦雄 (脳神経外科)  
 宮町 敬吉・阿部 弘  
 宮坂 和男 (同 放射線科)

subependymoma は主として脳室壁に発生する比較的稀な腫瘍であるが、その脊髄発生例は過去3例の報告を見るのみであり非常に稀である。我々は、組織学的に脊髄 subependymoma と診断された2症例を経験した。

症例1は55才男性。歩行障害、右下肢脱力にて発症、11年の経過により緩徐に症状が進行し当科入院となった。T9 より T11 の髄内腫瘍との診断にて手術施行し全摘出し得た。

症例2は57才女性。左下肢尺側のしびれ感にて発症、17年の経過で緩徐に症状が進行し当科入院となった。C5 より T2 の髄内腫瘍との診断にて手術施行し全摘出し得た。

病理組織所見はいずれも非細胞性線維性部分を背景とし、異型性のない astrocyte が集簇する典型的な subependymoma の像を呈した。過去3例の報告と共通して、脊髄 subependymoma は臨床的に極めて緩徐な経過をたどり、周囲の正常脊髄組織を非浸潤性に圧迫する境界明瞭で全摘出可能な良性の髄内腫瘍である。

39. 頭蓋内原発性扁平上皮癌 (類表皮癌)

の1例

佐藤 一史・吉田 一彦 (福井県立病院)  
 羽場 勝彦・村田 秀秋 (脳神経外科)

症例は45才男性。昭和58年7月頃より右口角のしびれ出現し11月9日当科初診。CT で右 prepontine cistern のごく軽度の拡大を認めた。以後しびれ感は徐々に右顔面全域に拡大。昭和59年9月、CT で右小脳橋角部に多房性に enhancement される径約2.5cmの腫瘤陰影を認めた。10月12日右後頭下開頭腫瘍亜全摘出術施行。組織は壊死、角化、核分裂像を伴った扁平上皮癌 (類表皮癌) であった。Gascan を初めとする全身検索はいずれも陰性であり頭蓋内原発腫瘍と考えられた。術後局所放射線照射、Bleomycin 投与により CT 上腫瘍はほぼ消失した。昭和60年2月15日独歩退院、現在外来通院中である。

本腫瘍は現在まで約20例の報告があり、類表皮腫が悪性化したとするものが多い。本例においてもこうした扁平上皮をもった良性腫瘍が癌化し、比較的急速な腫瘍増大を示したものと考えられた。